

お熱計らせて

「週末寸言」原稿 100306

S さんのご主人が「アラ還」の若さで身罷ってもう5年になる。死因は肝臓癌による多臓器不全。S 氏は、若い時分から知的で規矩の人だったという。この種の病の特徴で、今わの際まで意識がしっかりしていたので、よろず判断力は健康時と変わるところが無かったそう。それだけにあの時の、病室での「事件」の記憶が今でも S さんを悲しませている。

最期が近いという担当医の判断で東京から駆けつけたご子息と、病人の枕元で悲しみに打ちひしがれている時のことだった。若い看護師が検温のために病室に入って来るや明るい声で、「S さーん、おねーつ計らせてもらってもいいかなあー？」と「幼児」言葉を使って語りかけたという。あれから5年、夫人は「あの時、主人はどういう思いで検温してもらっていたのだから」と心に何か澱のようなものが溜まっているという。『あの時よくおふくろは泣き出さなかつたね』と後日息子から

言われたのですよ」と S 夫人は苦笑した。

この看護師、幼児言葉を使うことが弱者に対する優しさだと信じていたのだろう。老人福祉施設などを訪ねてみると、施設のお年寄りに向かって介護スタッフがかける言葉が専ら「幼児語」だ。あれはどうもいただけじゃない。たしかに、認知症におかされた老人の態度は幼児的だが、それは生活力を失った老人の一種の現実逃避ではなからうか。

筆者の亡父は、隣のデイケアセンターに行つて帰つてくると、きまつて家族に向かつて不平を吐露していた。博識だった彼はセンターの職員の問題に答えて、地域の故事来歴などを語つて聞かせるのだが、まるで子供扱いされ、真剣に聴いてくれない。どうも、自分の機嫌をとるために質問をあえてしてみるまでのことなのだ、と。

「ミネルヴァの梟は黄昏に飛び立つ」という。今逝く人達は、正に今が彼らの人生で最高の知恵の高みに達している「旬」だ。そんな彼らに向かつて、「庇護者」目線で幼児語を使って接するのは、軽侮にも似て適切でないのではな

いか。